追悼　橋本 泰子 先生

2022年10月18日、大正大学名誉教授の橋本泰子先生がご逝去されました。2022年の夏に一度お電話で「お会いできるとよいですね。」とお話をさせていただいたのが最後の電話となりました。毎年、先生のお誕生日頃にお電話をさせていただくので、お電話をしようと思っていた矢先のお誕生日の一日前の訃報でした。

１．橋本泰子先生との出会い

私と橋本先生との出会いは、1995年に西南女学院大学に先生が着任され、私が大学に入学した時に、さかのぼります。先生は、私が大学１・２年の時は担任として関ってくださいました。私が大学４年の時に大正大学に着任されましたが、進路についてなどいろいろ相談にのってくださいました。私は1999年に、先生のご指導を受けたいという思いで、大正大学の大学院に入学し、修士課程から博士課程で主査としてご指導いただきました。

２．橋本先生のスタイル

西南女学院大学で橋本先生の講義を受講していたのは、1995年～1997年にかけてで、介護保険制度が施行される前でした。先生は、審議会や研究会の委員でいらっしゃったこともあり、介護保険制度の創設に至るまでの様々な審議会や研究会において、何を目指そうとされたのか、また、先生の福祉に対する思いが伝わる講義でした。特に「高齢者介護・自立支援システム研究会報告」についてのお話をされるときは、研究会に参加できたことを誇りにしておられることが伝わってきました。

大正大学での論文指導においては、常に「エビデンスは？」と問いかけられました。うまくエビデンスを示すことができなければ、「この資料を見てみますか」とさりげなく資料をくださり、様々なサポートをしてくださいました。

論文指導においては内容で気になる点を指摘するだけでなく、初学者である私たちをどこかほめてくださいました。先生からのご指導は、もっと頑張らなくてはという気持ちにしてくださるものでした。

また、論文指導では、常にわかりやすい文章を書くことを指導されました。いろいろな文献を読みわかったような気になっている私に「これはどういうこと？」という質問をされました。自分なりに理解した内容を説明すると、「なぜそのように書かないの、今言ってくれた言葉のほうがわかりやすいわね。」とおっしゃられました。先生ご自身が誰にも理解しやすいとてもわかりやすい文章を書かれるので、それを伝えられたかったのではないかと思います。誰でもわかるということは、深く理解していないとできないことですし、本当は難しいことだと思います。

同級生と橋本先生のお話をしていて、出てくる話題は、先生のスーツ姿についてです。先生はビビッドな色のスーツを着られることが多く、ブローチやスカーフをさりげなく、しかもおしゃれにつけておられました。私たち学生は、「今日は何色のスーツかな？」などと話し、先生のスーツ姿を楽しみにし、元気をもらっていました。

先生は礼儀に対してはとても厳しい面があり、礼儀に外れた行為をすると、叱られました。先生のように率直に注意してくださる方が歳を重ねると減ってくるため、とてもありがたかったです。また、ご自分にも厳しく、先生が約束の時間に遅れた時は、「ごめんなさいね」と謝られ、お忙しい先生からそのような言葉をいただくことに恐縮していました。

先生は、ご著書のように「しなやかに、凛として」86年の人生を駆け抜けられました。私は、橋本先生のような学生指導は到底できませんが、少しでも近づけるようにもっと精進したいと思います。最後になりましたが、先生の御冥福を心からお祈りします。

十文字学園女子大学人間生活学部　**山口　由美**

追悼　平山 宗宏 先生

2022年（令和４年）12月30日、大正大学元教授の平山宗宏先生が94歳でご逝去なされました。平山先生には、在職中から退職後も大正大学社会福祉学会に対してご貢献いただきました。謹んで哀悼の意を表します。先生の経歴を簡単に触れつつ、僭越ながら大学院時代のご指導いただいた思い出などを綴ることで、感謝を表させていただきます。

平山先生は、1954年東京大学医学部を卒業され、1960年に医学博士となられた後、アメリカ滞在を経て1966年に東京大学医学部母子保健学助教授に着任されました。1971年には教授となられて88年定年で退官。東京大学名誉教授になられています。大正大学には1997年に人間学部教授としてお越しいただき、1998年からは特遇教授として2004年３月まで大学院の教授としてご指導いただきました。小児保健、母子保健、公衆衛生などの分野において歴任された役職は非常に多くあります。

2001年、大学院修士課程に入学した私は当初、高齢者関連の研究を進めるため、別の指導教授に付かせていただく予定でした。しかし、想定外のことが起こり、急遽平山先生にご指導いただくことになったという経緯があります。私は、学部生の時代に子ども関係のボランティア活動を行っていたため、児童分野への関心は本来ありました。先生は当初は「里子を預かった」と言っておられたのが印

象に残っています。研究手法も、研究に関するバックグランドも持たない私を優しく指導してくださいました。

研究のテーマは、当時の大学院の実践分析研究児童班が行っていた、病児・病後児保育に関連するものが良いだろうということになりました。当時の先生は病児保育の研究会などでご講演することもありましたから、そこへ「かばん持ち」として連れて行っていただき、普段なら入れないような場で学ばせていただきました。

当時、先生が所長を務められていた愛育病院に付属していた「日本子ども家庭総合研究所」にもよく出入りさせていただきました。修士論文の調査に関する指導は、もっぱらこの研究所でしていただきました。所長室には秘書の方がいらっしゃって、調査のサポートもしてくださいました。大学院生が行う全国調査ですが、返送先を研究所の所長室にしていただいたおかげで、回答率がとても高かったのは先生のお力以外何ものでもありません。

また、論文のご指導は先生のご自宅に伺って、赤を入れていただくのですが、終わった後は先生の行きつけの居酒屋やレストランなどに連れて行っていただくのが定例でした。この定例の会は、卒業後の方が頻回で、中村敬先生（現大正大名誉教授）も巻き込んで、つい数年前まで続いていました。３人で新潟に旅行に行ったのも良い思い出です。

約９年前、私の子どもは、早産でハイリスク出産だったため、愛育病院で生まれました。平山先生と同じ誕生日の双子です。生まれた時、先生は付属の研究所の名誉所長の職でいらっしゃったので、NICUへ様子を見に行っていただくこともありました。退院後は、前述の食事会の場を我が家に変更して、先生にお越しいただくことも頻繁にありました。そこは、子どもの成長を通して、先生の本来のご専門である分野のご指導をいただく場であり、修士論文の指導よりも卒業後の方が先生との交流は密でした。「出来の悪い子ほど可愛い」ということだったのだと思いますが、先生には本当によくしていただきました。

コロナ禍になってしまい、ここ数年先生のお顔を拝見できないまま、お亡くなりになられてしまったのは、本当に残念でなりません。

なお、ここに書ききれないほどの平山先生のご功績は、2004年２月14日発行の「創ること　護ること　探ること..　福祉社会を拓く道」（へるす出版）にまとめられておりますので、ぜひ手に取ってお読みいただければと思います。

語りつくせぬ思い出はまだまだございますが、最後に教え子として改めて心より感謝して締めくくりとさせていただきます。ありがとうございました。

文京区社会福祉協議会　**根本　浩典**